

藤田安二*: 精油成分より見たるコクサギ属

Yasuji FUJITA*: Genus *Orixa* (Rutaceae) viewed from the Constituents of Essential Oil

コクサギ *Orixa japonica* Thunb. (= *Celastrus orixa* Sieb. et Zucc.)¹⁾ は我本州、四国、九州に普通な芸香料の落葉灌木であつて、1属1種の特種なものとして有名である。

このものの精油はつとに篠崎氏²⁾により検索され、東京府下産のものより収油率 0.01% にて少量の精油が得られ、Camphene, Linalool, Terpene alcohol の Ester 及び Sesquiterpene の存在が推定された。

これ等の証明はなお不完全であるにかかわらず、現在では Camphene 及び Linalool を含むものと一般に信ぜられるに到つた。³⁾

著者⁴⁾は精油成分中に Linalool を多量に含有するものはその属の発生母体又はそれに近接した種である事を主張するが、もしこのコクサギの精油中に Linalool を含む事が真ならば1属1種の本植物は本属の母体そのものであり、従つてこの *Orixa* 属は生れたばかりの新しい属であると言う稀有の实例となる筈である。これははたして真実であろうか。

コクサギは以前は日本特産と考えられていたけれども⁵⁾、朝鮮南部にも産するし⁶⁾、又支那湖北省西部にも産する⁷⁾。

この事は明かに残存分布であつて、本種は本属の残存種なる事を示す。即ち *Orixa* 属は生れたばかりの新しい属ではなくて、古い属の残存であり、系統的には本種は本属中の生き残りの最後の1種か或は他属中のかけはなれた1種をその差異によつて別属として區別したものかのいずれかである。

この事は本種の精油成分の再検によつて決定されなくてはならない。

著者等⁸⁾は今回当所に於て篠崎氏によつて本精油再検のために採油された精油の保存しあるを知り、このもの及び新に著者等によつて採集採油された少量の試料を用いて本精油の再検索を行つた。その詳細は別報するが、収油率は葉及び実の 0.05%、枝及び幹の 0.03%；検索の結果 Camphene 及び Linalool の存在を全く証明する事を得ず、大約次の如き組成よりなる事が分つた。

Methylnonylketone 20%、Methylheptylcarbinol 6%；Aliphatic unsaturated alcohol $C_8H_{12}OF_3$ (?) 12%；Aliphatic unsaturated alcohol $C_9H_{18}OF_1$ (?) 5%；Unknown ester 32%；Sesquiterpene 10%、Sesquiterpene alcohol 15%。

これ等の精油検索は Methylonylketone 及び Methylheptylcarbinol の証明の外

* 大阪工業技術試験所精油研究室, Laboratory of Essential Oil, Osaka Industrial Research Institute.

はなお基だ不完全であるが、Methylnonylketone は芸香料植物精油中に屢々現われるものであり、精油成分によつても本属は決して生れたばかりの新しい属ではなく、古い属の残存である事が充分明瞭となつた。(1954. 5. 31.)

文 献

- 1) Thunberg: Flora Jap., 61 (1784).
- 2) 篠崎: 工化誌, 24: 563 (1921).
- 3) 柴田編: 資源植物事典, 230 (1949).
- 4) 藤田: 大阪工業技術試験所報告, 303: 65 (1954).
- 5) 本田, 向坂: 大綱日本植物分類学, 251 (1932).
- 6) 大井: 日本植物誌, 710 (1953).
- 7) Diels: Engler; Bot. Jahrb., 29: 423 (1900); 中井: 東亞植物, 57 (1935).
- 8) 上田, 藤田: 大阪工業技術試験所季報, 5: no. 3. (1954).

○スキヤクジャク九州(壹岐)に産す(外山三郎) Saburo TOYAMA: *Adiantum diaphanum* Blume, new to Japan (Kyūshū).

1953年の暮、玄海の一孤島、壹岐国の勝本中学校品川鉄摩氏から、同氏が同年10月、同島志原村大原(長崎県壹岐郡)で採集したという *Adiantum* の一品を送られた。みるとそれはスキヤクジャクであつた。あまり珍しいので伊藤洋博士にもお目にかけておいた。品川氏によればこの産地は壹岐の南端に近く、海岸から2k、あまりの地点で道路に面した崖に凡そ10m²にわたつて密生しているという。同島は全体が玄武岩よりなる一つの台地である。このシダは小笠原諸島の硫黄島(今もなお産するかどうかは疑わしい。)と台湾以南のいわゆる南洋に産するものであるがこんどこれが北九州の離島で発見されたことはなんといつても奇蹟というほかはない。

○千葉縣にシノブ自生す(浅野貞夫) Sadao ASANO: *Davallia Mariesii* Moore. newly found in Chiba Prefecture.

千葉縣には今迄シノブの自生を聞かなかつたが、昭和26年房州、田原村、今の鴨川町に住む自然研究者、太田和茂氏が、同村、大田学地区清澄山系の南側、雑木林の中で自生を発見された。今年7月4日、同氏の案内で実地を見た。量的には少いがケヤキの根元、枯木上を匍い長い分岐した根莖は落葉の下を横走していた。附近にはシイ、ツリバナ、アラカシ、ミツバツツジ、アオキ、マルバウツギが繁り日光が葉間を漏れる程度。下草にはコチヂミザサ、ナキリスゲ、ヤマシロギク、テイカカヅラ、ハコネシダ、ヒトツバが散生している。標本は国立科学博物館に納めて置いた。